
旅人。砂漠の蒼い月の下で

士功征宗

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

旅人。砂漠の蒼い月の下で

【Nコード】

N8675A

【作者名】

土功征宗

【あらすじ】

○旅する青年がいた。彼がさ迷う砂漠である男と出会う。蒼い月と星めく砂漠の夜に、男は彼に聞いた「……あなたは？」と――作品の出だしを読んで、詩と勘違いされておられるようですが、詩では御座いません。 著、（）、（）y・ 前トキしろろ

（前書き）

数年前に買ったリラクゼーションCDを久々に聴いていたら、何となく砂漠にたたずむ男の情景が浮かんできたので、ストーリーを付け加えてみました。（エニグマ／リターン・トゥ・イノセンス。シークレット・ガーデン／祈り。セイクリッド・スピリッド／聖なる大地の祈り。姫神／神々の詩など……）歌詞カードに歌詞はなかったので、歌詞を下敷きに書いたのではなく、あくまで音楽的なイメージで書いた作品です。文中に、【しおり】を挟み込んでみました。活字を読むのが苦手で一気に読めない方は目安にして頂ければ幸いです。短めの連載にすれば済んだ事なのですが、何となく味気ない気がしたので。

『語り継がれた詩』^{うた}

澄んだ空の色に、鉛色の雲が敷き詰めらる。透き通る無数の球体の粒は、大地に注がれてゆく。

青い雷が雲の中からその腕を伸ばし、空気をつんざく唸りと共に大地を叩く。そして、火は生まれた。

時が流れ、人々はその火を手にし、人の知恵として生活に彩りを添える。

母なる海は生命を生み、その海から連鎖する装飾の雨は、渴いた大地を潤し、新たな生命を育み、虹を架けた。

しかし、何時しか火を手にした人々は、その火により自らの身を焼き、その火は炎となり大地を焼く。とめどない炎は業火となり、この星までをも焼き尽くす。そこに神はいない。

しかし、生き残った小さな生命は、また新たな生命を生む。

さらに時が流れ、一本の名も知らない木が芽生えた。何時しか四人の旅人がその木の下に集い、桃源郷、理想郷を求め、一人は東へ。一人は西へ。一人は北へ。一人は南へと旅立った。

それを見送った小さな少年は、太陽の光に向って、自分の小さな掌を掲げた……

『物語』

その旅人の足は、砂漠の砂の中に少しばかり沈んでいる。

舞い上がる砂と、灼熱の暑さから身を守るための布を顔に巻き付け、微かな隙間から覗く眼が見えるが、それは細く萎められる。

太陽の日差しを遮るかのように、旅人は掌を掲げていた。

東から西へと迎う旅人のゆく先には、太陽が常に憎たらしい迄の白光のほほ笑みを浮かべてくる。

辺りを見渡せば、黄色い砂と、赤茶けた巨大な岩。多少の緑と殺風景な情景に似合わない赤い花が伺えるが、それは少ない。

その風景は目に見て分かるのだが、しかし彼は今、自分がどの国を旅をしているのかも忘れていた、ただのさ迷う人に成り果てている。

「私のこのなりは、寂れた画廊にすらない風景画の中にも描かれな
いだらう」

そう、絵にならない程にくたびれていた。

やがて日が沈みかけ、太陽は彼に手を振り、徐々に冷たい風が、服の隙間にしみ込んでくる。

砂漠の夜は、昼間と異なり、息が白く染まりだす。砂漠の精は、過酷なまでに襲い掛かる。

彼はその冷たい風に当たらないような岩場に歩み、適所を見つけると、その場に荷物を下ろす。疲労がため息と苛立たちさを取り分け引き立てたのである。

背に背負った荷物が重たいわけではないのだが、彼のくたびれた体がそう見せるのだ。

それでも彼は、すぐに腰を落とすわけではなく、辺りをとぼとぼ歩きだし、岩場に自分の姿を映しだした、くたびれた葉や、砂漠に根付いている木の革を剥ぎ取った。寒い夜を凌ぐ暖の為。

しかし、燃えるようなものが少ない砂漠では、気休め程度でしかない。

時がさらに経ち、日が完全に眠りに入ると、月が目覚めます。彼は枯草に火を着けた。寝袋に包まれたその体をくの字に曲げたまま、

燻るような火を見つめる虚ろな目。疲れているのに眠れない。腹は不思議と空かず、食事は塩と水を含んだ程度でしかない。

そんな体を無理に起こしているとしたか思えないのだが、彼の意識の中ではまったく言っていない程、その感覚は脳に伝わってはいないのだ。

死にそんなほどの細い吐息でも、寒さは深々と染み入ってくる。

口元に巻き付けていた布を解いて、その顔を露にしていたのだが、何せ、焼けた黒い肌に、べらべらに剥けた皮膚と埃に塗れる汚れた顔では実年令は知れない。

その彼は、おもむろに荷物をごそごそまさぐり出すと、古びたランプを取り出し、オイル缶も取り出した。少しばかりの量を注ぐと、吹いてしまえば消えてしまいそうな火を灯す。

十分暖をとれた訳ではないが、もう焚き火は消えていた。だからと言って、ランプの微かな火で暖をとるわけではない。彼はその不規則に揺らく灯をみていると、気持ちが悪く落ちて眠りに着くことが出来るのだ。彼にとっての子守歌。

灯を見つめ時間が経つにつれ、次第に瞼の裏側を覗くような仕草がゆっくりと表れはじめる。眠りに落ちる、いい心地になり始めた。辺りは宇宙空間そのもの。星めく天には大きくまん丸い月。その月は蒼い。時折、流れ星が降り注ぐ。地球の軌道に添うかのように丸みを帯びて落ちてゆく。とても静かな夜だった。

【 1・しおり】

その時、この静けさと彼の眠りには無用な音。そう、物音が背後から一瞬間こえた。だが、夢現つの彼は、その物音に一度反応はしたものの、自然の悪戯として、無意識ななかで片付けられ、また眠りに誘われていく。

しかし、それは気のせいではない。間違はなく彼に近づく音。砂

を深々と踏み、小さな砂粒が互いに擦れ合う音。

徐々に彼の耳にも聞こえ、我にかえって目を開いた時、物音は不思議と消えていた。

しかし、彼は気付いている。まだ、消えずに灯されているランプの明かり。その灯元に照らされた、二本の足先。確実に人間の物と分かった。

びっくりして飛び起きるような事はなく。彼は、寝そべったままの姿勢で、視線をその足元から徐々に上へ上へと滑らせていくが、ランプの明かりに慣れた目では、顔は暗くて良く見えない。

すると立ち尽くす者は姿勢を落とし、ランプの明かりにその顔を自ら照らして容姿を露にした。

「驚かせてしまったかな？ 申し訳ない」

髪は黒髪に多少の白髪混じりで、顔全体を茂らせている髭もそれと同化している。姿は一目で分かるほど、旅をしている男。

「明かりが見えたので……」

彼は驚く事もなく、寝袋から起き上がると、男に向かって腕を差し出した。

「どござ」

男はニコニコと微笑ましく荷物を下ろすと、丸めてある寝袋を尻に敷いて座る。

眠りに誘われていた彼だったが、その男の為に疲れた体をゆっくりと起こし始めた。

「横になっててかまいませんよ」

男はしんどそうな彼を見ていう。

しかし、彼自身招いてしまった以上、相手をしなくてはならない思いで起き上がったのだ。

「申し訳ない。私の我儘に」

彼は微かな笑みと、一つ首を傾げる無言の仕草。

男はほほ笑みかえす。

「今日の月は蒼く輝いていて美しい」

いつのまにか、男の視線は月を眺めていた。彼はつられるように月を伺う。

次に男は荷物を漁る。

出てきたのはアルコールランプと手鍋。水筒とビニールの袋に入る焦茶色した粒。明らかに珈琲なのだろう。

「あなたのカップはあるかな？」

彼にもご馳走してくれるらしく、男は手際よく湯を沸かし、珈琲を二つのカップに注いだ。

彼は聞く。

「すみません。しかし、貴重な水なのでは？」

すると男は出来たての薫り立つ珈琲を啜りながら微笑む。

「珈琲は私のステータス。飲まずして、何故、旅が楽しかろうか。あなたは」

あなたはの問いに、彼は一瞬、何を意味しているのか分からなかった。そこで、彼は話を合わせた。

「あ、はい。私もコーヒ……」

「いや、そうではない」

男は彼の答えに割り込んで言う。

「何を楽しみ、感じて旅を続けているのかと聞きたいのだが」

彼はカップを口元に運んぶその手を止めた。

そのまま男は喋り続ける。

「この砂漠は二日もあれば、抜けることが出来る。それに間に合うだけの水分があれば、それ以上必要ない」

男は珈琲を一口分、喉を通す。

「ああー」。

その吐息は、心の底から旨いと感じさせるほどのもの。そして男は言う。

「あとは、数杯分だけの珈琲の分だけでいい……」

男はそう言うと、また珈琲を口元に運ぶ。
暖かさが、全身に染み渡る感覚。それは男を目くるめく至福の世
界へと誘う。

その時。

「私は、何度もこの砂漠の熱に身を焼かれる感覚だけを思いだす。
しかし、何を目的とし、何を感じるかさえも忘れて旅をしまし
た」

突然、黙り込んでいた彼が、つぐんでいた口を開いたのだ。

【 2・しおり】

その言葉に一瞬男の動きが止まる。しかし、そこから珈琲を一気
に飲み干したのだ。

つふうー。

次は、大きな吐息。

「なるほど」

男は飲み終えたカップを、洗い流す訳でもなく、拭き取る訳でも
なく、ただ、無造作に荷物の中に戻し、こう言った。

「では、君の顔を拝見」

はっ！？ と思う。

彼でなくともそう思えるような言葉を語りだしたのだ。

「私に人相占いは出来ないが、旅人の顔は分かる」

彼は疑問に固まってしまいが、なんとなくその言葉に耳を傾けた
くなってしまった。不思議と。

「君の顔は汚い。もっと言えば醜い」

いくら何でも真つすぐ過ぎるぐらいの言葉。傷つくと言うよりは、
苛立つことの方が先にくる。しかし、彼は平然と聞き入っている。

「私は君のその顔が好きだ。君の物語を語っているよにみえるの

だよ」

彼は釈然としない。たいした事も成し遂げていない。しかし、思い出したことがあり、彼は言った。

「私は桃源郷、理想郷を求めて旅をしていました。しかし、それは見つからない」

男は表情を変えず、二本の腕を砂に伸ばし、二つの掌で砂をすくう。そして、微かに開いた隙間から、さらさらと砂は落ちる。その砂は小粒で、微かな風に煽られるだけで、流れ落ちる軌道を外れる。そして、男はこう言った。

「私にとっては、貴方と時を過ごすこの場所さえ、桃源郷でもあり、理想郷にすらなりえる。そう……そう思えばいい。心で、体で感じるままに」

彼は、言い返す言葉が見つからない。いや、例えあったとしても、その口からは出なかつただろう。

さらに、男は言う。

「君は若くして、行く先をも迷うのか？」

そのまま男は首をゆっくりと横に振る。

「違う。行きたくないだけなんだ。見つけてしまうのが恐いんだらう。終わりを」

男は穏やかな表情とは裏腹な、厳しい言葉を投げ掛ける。

そして、男は月に目を向けた。

「若者よ。後、数時間もすれば夜が明ける。少しばかり眠るといいもつ、それほど時間が経ったのかと疑わせるほど、時は流れていた。彼の感じないところで。」

彼は言われるまま、体を横にする。

すると、見計らっていたかのようにランプの明かりが徐々に小さくなりはじめ、じりじりと音を立てた後、そっと明かりが消えてしまった。

大きくまん丸い月のせいか、辺りは明るく男の姿が確認出来る。しかし、何か不思議な感覚。目の錯覚なのか。男の体が透けて見え

る。直観的に男が消えてしまつのが感じた。

「あ、あなたのお名前は……」

男は優しく言葉を返す。

「しがない風景画を描きながら旅するただの人。それだけだよ」

男は、その透けた体を立ち上がらせると、寝袋を荷物とまとめて背に背負つて微笑んだ。

「ここから西へ少しばかり砂漠を歩くと、巨大な岩山が表れる。そこに行つてみるといいだろう。君は思い出す。人々が忘れてしまつた、語り継がれた詩を」

そう言い男は微笑んだ顔をそのままに、彼に背を向けて歩きだした。うつすらとその姿が消えかかる。

「その足で歩きなさい。その手を掲げてみなさい。その顔で微笑んでみなさい。泣いて、怒つてみなさい。若きアジアの旅人よ」

そして、一瞬でその姿を東の方角へと消してしまつたのだ。

さすがに彼は驚いた。

「死人……だつたのか」

年は五十を過ぎたくらいで、背が高い。イタリア人のような感じはしたが、今はもう知ることは出来なくなつてしまつた。

すべては、何か男に操られていたような錯覚。彼も、時間も、空間さえも。

そして、まん丸い蒼い月は、静かに静かに姿を消してゆく。

【 3・しおり】

時は過ぎていた。太陽が再び、彼の前に姿を表す。地平線の向こう側から、彼におはようと眩しい挨拶をかわす。

その時、彼はすでにその砂漠の上にしつかりと立っていた。彼は変わったのではない。元に戻つただけなのだ。そう。出発した最初の旅立ちの日のように。志も。

彼はがむしゃらに歩いた。男に言われたその場所に、必死になつて歩いた。

足が砂にもつれて転んぶ。汗を吹き出した顔に砂がへばりついたとしても、力強く踏み締めて歩いく。

いつ頃のことか。どれだけ歩いて来たか覚えていない。その彼の足元に小さな影が、砂の上を這っていく。彼は立ち止まり目で追った。視線は徐々にながらっていく。

「……鳥だ」

そして、彼は大きく目を見開いた。

巨大な岩山。どこまで連なっているのかも想像もつかない岩山。そして、そこは砂漠の終わりの場所だった。

木々が生い茂り、草が生き、風が頬を撫で、鳥が舞う。彼は気付かなかつた。

一瞬で目の前にこの風景が表れたようで不思議だった。

そして、彼はそれとは違う感覚を得た。とても懐かしく、とても悲しく、失いかけていた物を手にしたような不思議な感覚を。

「なんなんだろう。この気持ちは」

彼の目が小刻みに揺れた。鼓動が早くなる。

————！！

突如、彼は走りだす。感じるまま、思うがまま。草木を掻き分け、岩場を飛び跳ねて……そして。

ザア————！

大きな音。涼しげな音。潤す音。それは、滝の音であった。

高さ、数十はあるう高さから、雪崩落ちる見事な滝。白水のしぶき。そこから流れる流水は、吸い込まれそんな透明度を誇っている。

その絶景を目の当りにした彼の目から涙が滴る。

そして彼の口から、ことう漏れた。

「……思い出した」

彼はゆっくりと歩みだす。そして、頭の中でめくるめく思い出が呼び起こされた。走馬灯の閃き。

南の小さな島に暮らす子供達と魚を捕った。凍てついた湖を犬橋で渡った。深き森を走る大きな河をカヌーで進んだ。地平線をのぞむ大地。そこに沈む夕日を恨めしそうに見つめる雄ライオンをカメラに映した。焼ける大地では裸で飛びはね、夜には太鼓の音と共に神秘的な舞を舞った。それらすべてを思い出したのだ。

そんな事を思い出しながら、彼は迷う事無く、歩み進めたその足を止める。

目の前には小さな洞穴。

彼はランプの準備を手早く済ませると、火を灯して暗がりの中へと突き進む。迷いはなかった。

それほど深い洞穴ではない。その中で、最後は絶対に思い出さなくてはならない事。

彼は足の動きを止めた。

少し冷える岩壁。そのしんみりと淋しいその場所に、白骨化した骸。

そう、思い出した。

「私は、この場所で死んでいた……」

何時の間にか夜が訪れていた。彼はまだその場に立ち尽くす。

何気なく、顔をあげてみると、ランプの明かりが微かに届く岩壁に、何かが描かれていた事に気付く。

太陽とおぼしき大きく丸く描かれた壁画。それを見上げる人々。

その隣には月。同じく見上げる人々。さらに火を掲げて走る仕草の

人の絵。それを一区切りするかのような、円が描かれていた。

「これが、語り継がれた詩？」

太古の昔に、この地に人々が住み、親から子へ、子から孫へ。そして……いつから語られ、何時、忘れ去られたのかもわからない。何が語られたのかも、彼には想像もつかなかった。

そして、何度目かの陽が昇る頃。彼は、岩山の頂上に立ち尽くしていた。

陽が昇る方角の空は白い。そして群青色。まだ、星々が残っているが、月は眠る。そこからは遙か遠く果てまで見渡せる。そこで彼は大きく深呼吸をした。

名も知らない木よ。名も知らない花よ。名も知らない大地よ、海よ、鳥達よ。名も知らない詩よ、旅人よ。

名前は知らなくてもいい。時には触れてみよう。時には感じてみるだけでいい。そっと手を添えてみよう。ちよっとした変化に気付くだけでもいい。そして、ちよっとした何かを伝えてみよう。

「あの人は、私の名前を思い出させてくれた」

そう呟いて、まだ夜も明け切らない時、彼は岩山の頂上から手を大きく広げ、身を投げ出した。

滝の様に落ちかかる体は、一瞬にして青白く輝く魂に変わる。そして、何粒にも分裂し輝きを残しながら、天に向かってゆっくりと浮上していったのだった――

蒼く輝く月夜の砂漠。二人の旅人が居た場所には、西に迎う足跡はなく、ただ東に迎う足跡だけが点々と連なり、遙か砂漠の終わる彼方まで、それは続いていた。

(後書き)

本作品。『旅人。砂漠の蒼い月の下で』を読んで頂き誠に有難う御座いました。私的では御座いますが、20作品目になります。本来、別の作品を予定していましたが、本作品を先に投稿いたしました。尚、今後タイトルを一部分変更する場合がございますので御了承ください。

旅人。砂漠の蒼い月の下で

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8675a/>

旅人。砂漠の蒼い月の下で

2009年3月22日07時43分発行